

平成 23 年度 「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」 共同利用型

映画スタジオ ЭТК の運営と成果

前田恵

ここ数年の «Киноведческие записки» には、映画スタジオの経営について書かれた記事、論文が見られる。ロシアのあり方自体に関連した自然な傾向だろう。資金の心配——フィルムの値段を知らずにいられたソ連時代とは異なり、現在の映画界では、資金繰りが最大の問題と言ってもいいだろう（ソユーズ・ムリトフィルムの歴史をまとめた DVD 『マギヤ・ルスカ——アニメの世界、ジョナサン・ズール、マーシャ・ズール監督、2010』でも繰り返し触れられている）。遡ること約半世紀、この問題に取り組んだのが、ЭТК（Экспериментальная Творческая Киностудия）だった。組織したのは、『誓いの休暇』で知られる Григорий Чухрай（1921-2001）と経済学者 Владимир Познер（1908-1975）だ。1965 年に活動を開始したこのスタジオの経営理念は、1. 維持費の削減、2. 「話し合い」による合意、3. 歩合制、4. 1700 万人以上の集客にある。1968 年の「プラハの春」までの約 3 年間はシナリオの選択から映画の上映までをゴスキノ（ソ連邦国家映画委員会）の干渉を受けずに ЭТК がすべて取り仕切っていた。その後、徐々にゴスキノの圧力が加わるものの、「Не горюй!», Георгий Данелия, 1969》、「Белое солнце пустыни», Владимир Могиль, 1970》、「Двенадцать стульев», Леонид Гайдай, 1971》、「Иван Васильевич меняет профессию», Л. Гайдай, 1971》、「Афоня», Г. Данелия, 1975》、「Раба любви», Никита Михалков, 1976》など、大ヒット作を含む 38 本を製作した。これを、ЭТК がスタジオ経営を成功させていたと判断する指標のひとつとすることはできるにしても、成功の最大の要因はなんだったのかを、できるだけ具体的に明らかにしたい。そのためには、ほかのスタジオの運営について知ることが不可欠である。

幸いなことに、スラブ研究センター図書室にはロシア映画史をたどることのできる資料があり、なかでも、「Летопись российского кино 1946-1965», Александр Дерябин, Канон + РООИ "Реабилитация", 2010» には、映画に関わる議事録が収録されており、ЭТК 以外のスタジオの製作過程を見ることができる。また、「Historical Dictionary of Russian and Soviet Cinema, Peter Rollberg, Scarecrow Press, 2008 » にはロシア映画にかかわる文献集が附されており、効率的な資料収集に役立てることができた。

まだまだ課題は山積みだが、最初の一步を踏み出す機会をいただけたことをとても幸運に思う。